

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 14 日現在

機関番号：32695

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885102

研究課題名(和文) 世代の断絶から捉える実践知の生成継承性に関する発達臨床的研究

研究課題名(英文) Developmental clinical study about generativity of practical knowledge from the viewpoint of discontinuity of generation

研究代表者

竹内 一真 (TAKEUCHI, Kazuma)

多摩大学・公私立大学の部局等・講師

研究者番号：10737571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では断絶から復活を遂げた杉原紙を対象として、不在の先行世代との関係性の再構築プロセスを明らかにした。その結果、復活に携わった当事者らの復活の意味づけと世代を超えた技術の再構築プロセスが明らかになった。一つ目の復活に携わった当事者らの復活の意味づけからは、生成継承性の相互作用が起きる要因として歴史性と正統性が重要であることがわかった。次に二つ目の世代を超えた技術の再構築プロセスに関しては物語に基づいた共同体の再構築と生成継承性の連鎖という点が明らかになった。最後に、文化には消滅と継続の間に睡眠と呼ぶような状況があり、睡眠からの復活を通じてより自由度の高い形で復活が行われることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies reconstruct process of relationship with non-existence generation for revived skill which had lost once. I focus on Sugihara paper which passes down at Takatwon in Hyogo prefecture. There are two approaches to clarify the purpose. First approach focuses on meaning about revival for three people who have conducted to revive skill through life story interview. The data show that historicity and legitimacy are important as factors which cause interaction of generativity. Second approach focuses on reconstruct process of skill over generation. I interview first generation and second generation who conduct revival of skill. The data were revealed that it is important to reconstruct community based on narrative and chain of generativity for revival. In conclusion, there is sleep mode in culture and revival from sleep makes culture more free change.

研究分野：発達心理学

キーワード：生成継承性 生成的ライフサイクルモデル 技術継承 世代越境 ナラティブ・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究背景

現代社会においては実践知を素早く、かつ確実に学ぶ必要がある。知識社会と呼ばれる現代においては、先行世代が有する実践知を必要に応じて素早く継承し、適時刷新していく必要がある。一方で素早さを優先するあまり未熟なまま能力を使うことになれば、基盤となる社会それ自体が危険に晒されることになる。従って、実践知の継承やそのプロセスに関する心理的側面を明らかにし、それに基づいて知識社会に合致する専門家育成の在り方を考えていく必要がある。

(2) 熟達研究と生成継承性研究の限界

これまでの熟達研究では先行世代が伝えようとしている実践知を本当に受け継ぐことができたのか、後続世代にどのように受け継いでほしいのかといった先行世代や後続世代と実践知を学ぶ当事者との関係性に関しては十分に焦点が当てられてこなかった。また、生成継承性に関しても先行世代から何を受け継ぎ、後続世代に何を伝えようとしているのかという経験の内実や世代間の関係性の築き方に関する部分は、むしろ研究の背景となってしまう十分に研究が進められてこなかった。

2. 研究の目的

(1) 復活に携わった当事者の復活の意味づけ

一つ目の復活に携わった当事者らの復活の意味づけでは、なぜ復活をさせようと思ったのかという動機と杉原紙復活の関わりに焦点を当てる。先行世代との関係を取り結ぼうと思っても、不在という状況においては直接的に先行世代と話をしたり、見たりすることができない。そのため、過去の技術に引き付けられる誘因が乏しい。しかし、一度復活を志せば、片手間ではできないため生活は復活が中心になってきてしまう。そのような状況にもかかわらず、なぜ世代の断絶を埋め、次の世代に技術を残そうとしてきたのか、その意味づけを明らかにする。その際に、本稿では複数の当事者たちから当時の状況を羅生門的に捉え、復活への結びつきや当事者の相互の関係性などを重層的に浮き立たせる。

(2) 世代を超えた技術の再構築プロセス

一度断絶を経た技術が復活させるとしても、長期間にわたって途絶えていれば、その過程は容易ではなく、場合によっては世代を超えて復活を行う必要が出てくる。そこで、復活をさせた世代が復活に向けて実施してきたこと、そして、後続世代が現在復活に向けて実施していること、あるいはこれから実施しようとしていることを明らかにし、先行世代の不在の影響とその影響を乗り越えるための復活のプロセスを示す。

3. 研究の方法

(1) 断絶から復活を遂げた杉原紙

本研究において研究対象としたのは兵庫県多可町杉原谷地区において100年ほど前に一度すたれてしまった後、今から50年ほど前に復活が果たされ、現在も継承されている杉原紙である。

復活に携わった当事者らの復活の意味づけに関しては三人に研究協力を依頼した。具体的には復活に際して技術を継承することになった杉原紙研究所の元所長で現在技術顧問のA氏、兵庫とは異なる県のX地域で紙漉きを行っておりA氏に対して和紙の技術指導を行ったB氏、そして、行政的にA氏とB氏のサポートに当たったC氏である。

ここで最初に復活を行い、技術を継承したA氏を復活第一世代とする。本稿では復活第一世代より技術を受け継ぐものたちを復活第二世代とする。世代を超えた技術の再構築プロセスでは復活第一世代のA氏と、復活第二世代として加美町(現多可町)役場から転職して現在杉原紙研究所の職員で紙漉きを行うD氏と、岐阜県で紙漉きを20年ほど学び、多可町に移り住んできた杉原紙研究所の職員のE氏に研究協力を依頼している。

(2) ライフストーリーインタビュー

復活に携わった当事者の復活の意味づけ復活の立ち上げに深くかかわったA氏、B氏、C氏の3人にライフストーリーインタビューを行った。インタビューでは生い立ちから杉原紙に関わるようになるまで、復活への関与の仕方、復活が自らの人生に果たした役割という3点を中心に話を聞いている。それぞれ、フォーマルなインタビューをA氏に対しては2回、B氏に対しては1回、C氏に対しては3回のインタビューを行っている。インタビューの場所はA氏とC氏に対しては杉原紙研究所であり、B氏に対してはX地域の和紙会館でそれぞれ1回につき1時間30分から2時間程度行っている。

世代を超えた技術の再構築プロセス

A氏に加え、D氏とE氏にもライフストーリーインタビューを行っている。フォーマルなインタビューをA氏に対しては1つ目のインタビューとは別に2回、D氏に対しては1回、E氏に対しては2回のインタビューを行っている。A氏に対しては復活させて以後、どのように杉原紙を発展させてきたのか、そして、現在をどのように捉えているのか、さらに、後続世代にどのように受け継いでほしいと捉えているのかという3点を聞いている。D氏とE氏に対しては生い立ちから杉原紙に関わるまで、そして、杉原紙の現在の捉え方、今後に向けた杉原紙への想いという3点を中心に話しを聞いた。インタビューの場所は全て杉原紙研究所であり、それぞれ1回につき1時間30分から2時間程度行っている。

4. 研究成果

(1) 生成継承性の相互作用が起きる要因

杉原紙の三者の生成継承性を結び付け、相互に補い合うように働いた要因は大きく二点挙げられ、一つに杉原紙の歴史性があり、今一つにその歴史を語る正統性が挙げられる。三者それぞれ立場はちがうものの、杉原紙の歴史性は復活に関わる一つの動機となっている。生成継承性の動機に関する議論では、成人になるに従って芽生える社会的に負うべきとされる責任や望ましさを文化的な要請と呼び、重要な要素の一つとして考えられている。杉原紙は日本の歴史の中でも燦然と輝く歴史的に著名な和紙といえる。それ故、歴史ある杉原紙の復活は生成継承性に関して社会的な要請という観点から働きかけ、多数の協力者を産み出したと考えられる。

この杉原紙の歴史性という点に加えて、正統性という点も見逃すことのできない重要な点であろう。A氏にもB氏・C氏にも共通しているが、藤田氏によって書かれた「杉原紙」を基に杉原紙の歴史を知り、そして、畏敬の念を持つに至っている。言うなれば、藤田氏の著作物が杉原紙の歴史性を示す証左となっていると言える。藤田氏によって詳細が明らかになることで、杉原紙の歴史にアクセスできるようになり、だれが杉原紙の歴史を語り継ぐことができるのかという正統性が明らかとなった。

技術が途絶えたとして、その途絶えた技術はすべからず復活を果たすわけではない。途絶えた技術に魅力を感じ、復活に向けて志を同じにする人々が集う必要もあろう。ここまで見てき理解されるように、寿岳氏や藤田氏の尽力があり、杉原紙と杉原谷地区が明確に結び付けられた。杉原紙の歴史が結び付けられたことで正統性が明らかになり、杉原谷地域に住む人々や関係者の生成継承性が突き動かされ、復活へとつながったという流れであると理解されよう。

(2) 技術の復活に至るプロセス

失われた技術の復活には物語に基づいた共同体の再構築と生成継承性の連鎖という二つの側面からの復活を達成する必要があることを明らかになった。

物語に基づいた共同体の再構築に関しては、過去の物語を基にその物語に沿った制作物が作成できるような共同体を作り上げていく。A氏は藤田氏によって書かれた「杉原紙」など過去の文献に記された白さという過去の杉原紙に関する物語に沿って、現代においても白い和紙が漉けるように研究所の中だけでなく、周辺の整備を含め共同体の再構築を行っているのである。

二つ目が生成継承性の連鎖という側面であるここで、先行世代が生成継承性の働きによって産み・育てた人や技術、制作物を痕跡と呼ぶことにする。杉原紙の場合は、藤田氏による「杉原紙」をはじめ、第三者によって

書かれた杉原紙に関する情報は比較的多く残っている。そのような情報を基にして、白い杉原紙を漉くための共同体を再構築することができた。しかし、著作物などはあくまで生成継承性の働きによって作られた制作物の間接的な痕跡に過ぎない。このような間接的な痕跡だけでは当事者の継承の意識が十分に満たされていない。そこでより継承の意識を確かなものとするために過去に漉かれた杉原紙を探す。このように、復活に際しては継承の意識を明確なものにするために、より直接的な痕跡が必要となってくるのである。

(3) 総合考察

杉原紙の復活を見ても理解されるように、一度担い手がいなくなり、文化が途絶えたとしても、永遠にその文化がこの世から姿を消すわけではない。途絶えた文化に対して意義を認める後継者が、当該の文化に関して何らかの資料を見つけたり、人伝で聞いたり、建築物があつたりすることを通じてその文化について知り、かつ正統性が保証されれば、生成継承性の働きによって再び現前し、止まった時計は動き始めるのである。ある意味で後継者が途絶えた文化に関して資料であつたり、人伝であつたりを通じて痕跡が残されている限りは当該の文化が復活する可能性を有している。逆に言えば、過去の痕跡があらゆる形で消えてしまえば、後継者が途絶えた文化にアクセスできなくなり、現実的にその文化は失われてしまうといえよう。

一度、文化の担い手がいなくなり、途絶えたとする。その時途絶えた文化を復活させる誘因のひとつとなるのが、その文化の歴史性であった。杉原紙の事例を見てもわかるように、長く栄華を極めたような文化が時間を経て廃れていき、やがて後継者が途絶えたとしても、すべてが無に帰すわけではない。ある時代に大きな足跡を残した文化であればあるほど、その歴史が呼び水となり、復活の日の目を見る可能性も高くなるのである。

このように考えるならば、文化には消失と継承という二つに分かれるのではなく、その間の状態として語りによってアクセスはできるが、継承はされていないという第三の状態が存在することが理解されよう。本稿ではこのような状態を「眠っている」として捉え、睡眠状態として措定する。消失、睡眠、継承という三つの状態は現時点でその状態であるからと言って未来も同じ状態であり続けるといったような固定的なものではない。例えば、杉原紙のように睡眠から継承へ移行することもあれば、何らかのきっかけ、例えば、ある文化の資料が見つかることで消失から睡眠へと移行することもある。それぞれの状態はあくまで現時点での状態を指し示すものに過ぎず、非常に柔軟に推移しうるものなのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

竹内一真, 現代社会における実践知の越境に関する先行研究とその意義: 世代を超えて経験が伝わっていく仕組みと学校教育の限界, 多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要, 査読無, Vol.8, 2015, pp.109-121

〔学会発表〕(計 2 件)

竹内一真, 失われた技芸の復活から捉える学習と継承の相違: 社会文化的アプローチにおける世代という視座の必要性, 日本教育心理学会第 57 回大会 (新潟コンベンションセンター), 2015

竹内一真, 実践知の復活における断絶された世代をつなぐナラティブの役割: 杉原紙復活における生成継承性の役割, 日本質的心理学会第 12 回大会 (仙台), 2015

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内一真 (TAKEUCHI, Kazua)

多摩大学・グローバルスタディーズ学部・講師
研究者番号: 10737571